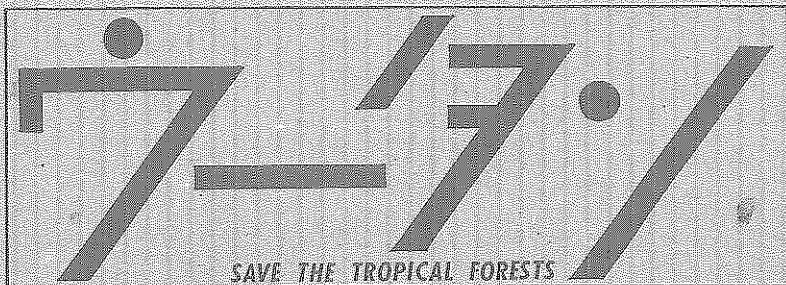


森 の 通 信

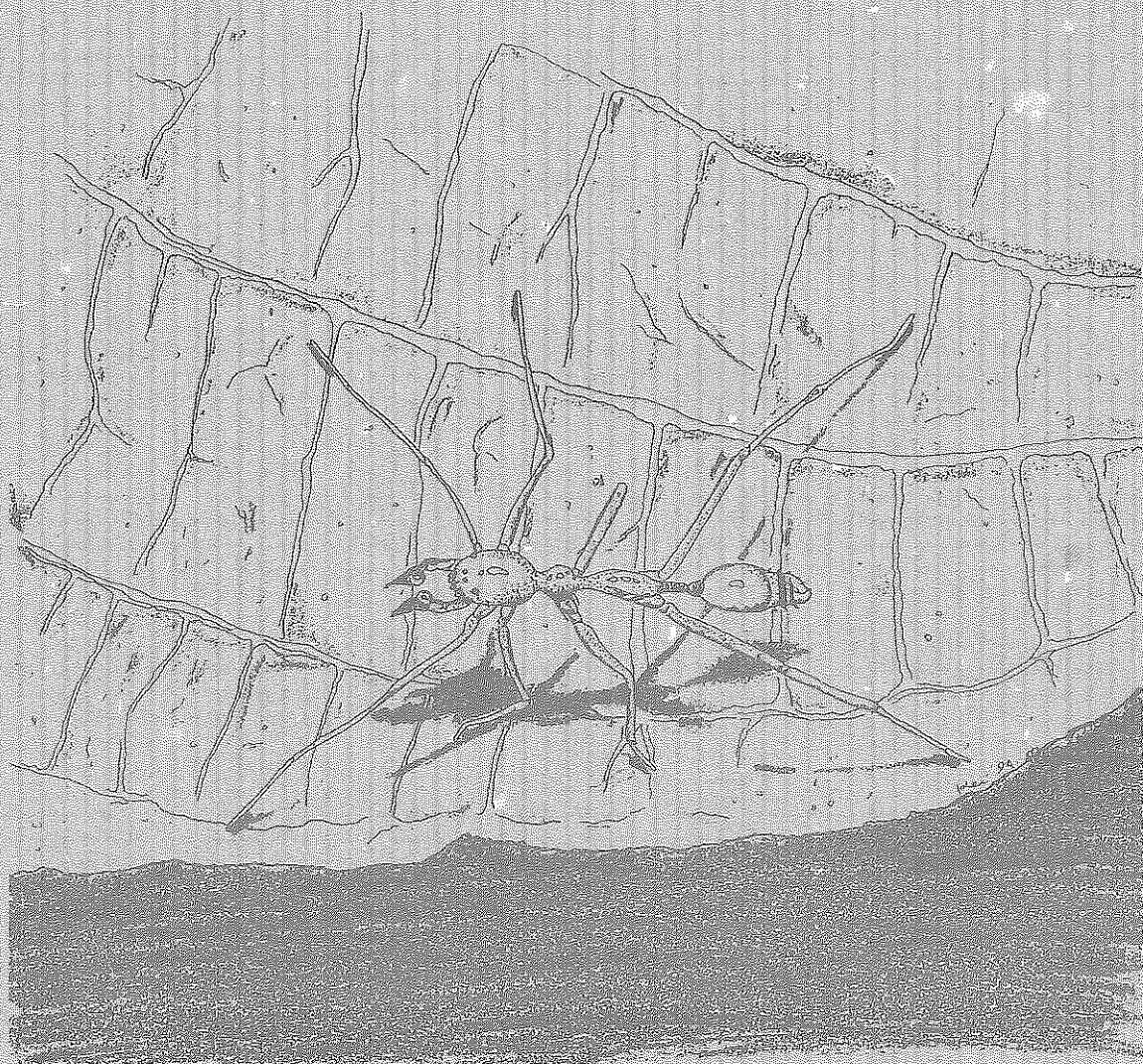


SAVE THE TROPICAL FORESTS

33

Watan

1994年10月2日発行



SPIDER MIMICKING ANT (71)

ウータン・森と生活を考える会

〒530 大阪市北区中崎西1-6-36 サクラビル新館308号「関西市民連合」事務所気付
phone 06-372-1561

【一部】300円

【年会費】3000円

【郵便振替】00930-4-3880

PRINTED ON RECYCLED PAPER

everybody on The 熱帯林!

・江本 静

ほんの一カ月前、あるボランティアブックからウータンを知った。

二年前、私が今の会社に就職した理由は、環境問題に真剣に取り組み、社会に貢献しているからである。しかし、志望動機とはまったく掛け離れた仕事をする毎日に、「このままではいけない!」の連続だった。

そんなある日、「私に出来る事はないか?」とうろろ探していた時に、ウータンに出会った訳である。

熱帯雨林伐採について、ニュースで報道される程度しか知識のなかった私は、実際に様々なアクションを起こしているウータンの方々に触れ、自分の無責任さが恥ずかしくなった。

今、私の環境保護への取り組みが始まった。どこまで出来るか、自分の力をウータンの方々と合わせて、熱帯雨林保護活動に取り組んで行きたいと思っている。

「ウータン活動報告」

- 6・25 出前講座「姫路・地球人クラブ」
26 サラワク・キャンペーン委員会の「総会」に参加し辻継
30 府下自治体熱帯材削減状況まとめ
- 7・7 通信「ウータン」第三二号發送。
9 第三回「削減検討会議(仮称)」熱帯林きょうとと。
10 熱帯林連続講座第四回「猪俣さん大阪府と話し合い。府の営繕室は、」
12 「仕様書で今後七五%削減の建築物を造る予定」と発言。
- 8・9 奈良、京都のグループと、第四回「熱帯木材削減検討会議(仮)」
堺、豊中、吹田、高槻、茨木、守口、門真各市へ「熱帯木材の使用削減をされた今後の取組みの要望」送付。
- 24、28 第四回「枝打ち」丹波大山町でウータンは協力

森の通信

Huron 32号 目次

CONTENTS

- ・自治体キャンペーン報告 IN 大阪 …… 3
- ・ウータン・ニュース「令和元年の秋に調温」 …… 6
- ・熱帯林連続講座 第四回 …… 7
- ・「えだうち in 丹波大山」 …… 8
- ・「南太平洋に草の根のつながり屋」 …… 10
藤野 達也
- ・連載「熱帯林を考える」猪俣 崇一
⑥ 杯型「区別」の主な種類 …… 13
- ・お便り紹介 …… 18
- ・ウータンギャラリー (photo 村上 真) ⑫ …… 19
- ・スケジュールなど …… 20
- 【表紙】絵をさがさず、こいつは「アリ」のろが「クモ」のろかと考えていました。⑭

熱帯木材不使用へむけて

FROM OSAKA

自治体キャンペーン経過報告

【大阪府との話しあい】

9 4 . 7 . 1 2

井下祥子

今回は、ちょっと拍子ぬけ：

大阪府庁の近くの日赤会館にて、四
部局（環境保健部・土木部・建築部・
企業局）6名の人たちと話し合いました。
あらかじめ送っておいた質問状（「
さらなる熱帯材使用削減のお願い」）
にそってのやりとりは……。

1. 府知事が「現在より75%以上
熱帯材の使用を抑制する」と発表
されたが、時期はいつ？
また、各年度の使用量と削減率
を教えてください。

△建築部・営繕室▽

* 時期は未定。各界の意見をじっく
り聴いてから……。

* 削減量は、

平成3 . 4年……二千五百㎡

（立木三百五十本）

平成5年……千七百㎡

（立木二百五十本）

本年度……不明

2. 新庁舎の設計での削減率は？

△建築部・営繕室▽

* 新別館の第一期工事では75%
の削減。

今後モデル建築については

75%削減できると思う。

大型の工事では75%が針葉樹

25%が熱帯材の型枠だ。小さい

工事には強制しないが、市場が複

合合板に切り替わりつつある。

3.

削減のため、今後どのような工法
を用いる考えか？

* 針葉樹・複合合板と、部分的には

PC（プレキャスト）：工場でもつ
て造ったコンクリートを、現場で

組み立てる工法。コンクリート・

パネルを使わずに済む）で。

ただし、PC工法は使える場所
が限られている。

Q：塗装合板（何度も使えるように
表面を加工したもの）は？

A：仕上りに美しさを求める場合は

特に指定するが……たとえば、

府の工事だけで二十回使用する

「ということではできない。

もちろん、転用回数を増やす

よう指導はしている。

4. 建築部、企業局、土木部などでの削減量は？

土木部・土木監理課▽

*木製の型枠（コンパネ）は転用を考えている。鋼製型枠は木製と単価が変わらないので、できるだけ鋼製を使うよう指導している。

*平成3年度の調査では、鋼製は一部しか使用されていなかった。

平成6年度に再調査し、まずは実態をつかみたい。

△企業局・企業監理課・▽

*型枠使用量は四百㎡と少ない。削減量は不明。

5. 熱帯木材をふくめた資源のリサイクル計画は？

△環境保健部・環境局環境整備課▽

*とくに建築廃材については取り組んでいない。

*木製粗大ごみリサイクルなどについて市町村に技術的なアドバイスを行っている。松原市でのチツブ化の試みは府下にひろげたい。

6. 削減のための調査予算は？

*予算措置はしていない。

「地球環境と共生する建築技術の検討調査委員会」が開かれている。予算は六百万円。

太陽熱利用など、さまざまな技術のうち、何が使えるか検討して指針を作っている。が、熱帯材削減については（取り組みがすすんでいるということ）あまり検討されていない。

府側の中心は、女性です。

「建築部 営繕室 参事」という肩書きの川上さん、前任者からひきついでおととしからの交渉相手ですが、対応に誠実さが感じられます。

同性としては、「男社会で頑張るのはたいへんやるな」とエールを送りたい気もします。

が、府としての方針は、いまひとつ「熱帯材の使用を是非とも減らすぞ」という意気込みが感じとりにくかったです。

他の自治体より一足早く、モデル工事に取り組みなど、「さすが大阪府」と期待が大きかったのですが、

熱帯材の不足から、合板業界も針葉樹合板への転換をはかっている、その流れに乗るだけでなく、コンパネの転用回数をふやすことや、廃材のリサイクルなどに積極的に取り組み、「環境自治体」として、他をリードしていただきたいと思えます。

ウータンの方から熱帯材削減について東京都の出した資料を渡してきました。複合合板・針葉樹合板を使った業者へのアンケート調査などです。

「全国六三自治体が熱帯木材使用削減」

四月二二日のアースデーに、全国のグループが「質問書」や「要請書」を出したんですが、六月末は未だに返答が返っていない所も多いようです。

六月末の全国の熱帯木材使用削減状況は北から北海道、札幌市と二自治体、関東は東京都、田無市、埼玉県、大宮市、越谷市、所沢市、北本市、富士見市、松伏町、浦安市、神奈川県、川崎市、横浜市の、横須賀市、逗子市、相模原市、秦野市、湯河原町、藤野町、千葉県と二〇自治体。中部は新潟県、石川県、七尾市、静岡県、静岡市、愛知県、名古屋です。大阪府を除く関西は、京都府、京都市、兵庫県、神戸市、尼崎市、芦屋市、川西市と七自治体。中国・四国は広島県、香川県、愛媛県。九州は福岡市、熊本県。大阪府下の二二自治体を含むと、全国で六三自治体が熱帯木材使用削減と拡がっています。なお、「検討中」と答えた自治体も全国に幾つもあり、増えていくと思います。ウータンでは、大阪市、大阪府に次

いで、堺、豊中、吹田、高槻、茨木、守口、門真の各市と話し合いを八月末頃に行っていたと考えています。

今回、大阪府と大阪市を話し合って判った事は、「特記仕様書」がある大阪

熱帯産木材の使用削減率

大阪府40%、全国一

公共工事

府の削減率は七五%で、それが大きい大阪市の削減率が一〇%と大きく違います。今後、各自治体は「特記仕様書」を作り、業者に削減を働きかけるべきです。
〔文責・西岡良夫〕

熱帯雨林の破壊防止に協力しようと、大阪府をはじめ、府内の半数の二十二自治体が公共工事での熱帯産木材使用削減に取り組み、全国一の達成率になっていることが二十日、市民団体「ウータン・森と生活を考える会」(大阪市)のアンケート調査でわかった。従来の三%しか使わなかった工事もあり、同会は予想を上回る成果と、さらに使用削減を求めている。

工事の鉄筋の間にコンクリートを流し込む際の型枠などとして重宝されている。しかし、二、三回使って廃棄するケースが多く、同会などが数年前から各自治体に公共工事での使用削減を呼びかけていた。調査結果によると、大阪府は五億円以上の建築工事で平成四年度十四件、五年度二十二件のモデル工事を定め、針葉樹合板や金網の型枠を使った。今年度も五年度並みのモデル工事を進めており、現在、削減率は四〇%。年間三百七十本分

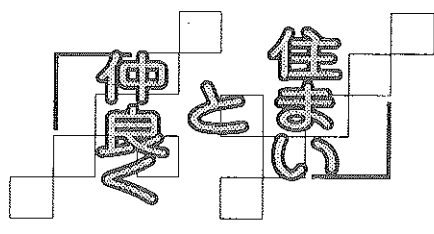
に当たるという、将来は七五%が目標だ。大阪府は、五年度までに十七件のモデル工事を実施。昨年九月に完成した「UNEP国際環境技術センター」(鶴見区)建設工事での熱帯産木材使用率はわずか三%にとどまった。このほか豊中市、藤井寺市など、府と府内の計四十五自治体のうち、二十二自治体がすでに取り組んでおり、九自治体が実施に向けて「検討中」としていた。一方、他府県では兵庫県、京都府など四十一の自治体

が削減中と回答したが、全国的には削減率はまだまだ低いという。西岡良夫・同会事務局長の話「パプアニューギニアやミャンマーでは日本への輸出用に急激な伐採が進んでいる。今後は未実施の自治体や民間企業にも削減を求めている」

(94.7.20 誌)

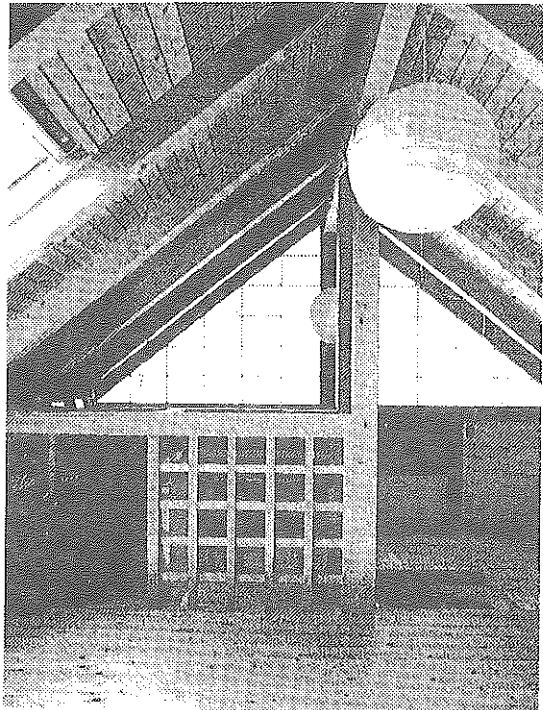
現在の木造住宅のほとんどは、熱帯材を利用した合板でつくられている。壁や床をつくる下地材、屋根をつくる下地材としての野地板など。ほかにも床のフローリング、壁、天井の内装材として、表面に薄い路木、または木目柄がプリントされたビニール張り付けの製品が大量に出回っている。

本物の木の場合、高価な木を使え



厚みのある木

合板使わず快適に調湿



別の話だが、生きた材料である木の性質として割れや狂いが生じる。加えて、節などを嫌がる日本人の妙な癖症的性格もある。こうしたことに対するクレームを避けるため、つくり手側は積極的に合板でつくり

合板を一切使わない住宅の建て方をみると、野地板には建築現場の足場板に使われていた厚さ二・五センチの杉板を使っている。これを室内から見ると、野地板が天井板も兼ねてい

厚みのある木が、空間を温かく包み込んでいく。このような木の空間は、木材の調湿作用によって湿度が高い梅雨の時期も、こぢんまりと過ごすことができる。ビニールクロスや合板でつくられた住宅に住み、クレーなどの機械設備にのみ快適性を求めることで、体の調子をくずす人も多い。

それを考えれば、熱帯材でつくられた合板を使用しない家や、節や割れが多少あっても、木をおおらかに使った家は、住む人にとって健康的な住宅を提供してくれるといってもいいかも知れない。

M.S.建築設計事務所
三澤 文字

三澤文字には、92年に「守れ、熱帯林シンポジウム」をパネラーとして参加していただいたことがあります。今年の6月に「木造住宅の可能性ー木にこだわってー」MAX ALBANZA・物図書出版社より270円が出版されています。ごらん下さい……。

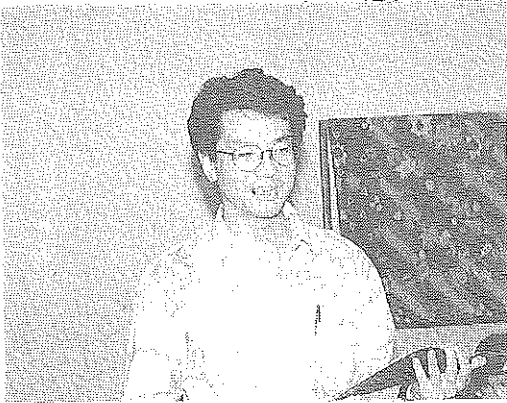
三澤文字 [みさわふみこ]

1956年、静岡県に生まれる。
1979年、奈良女子大学理学部物理学科卒業。
1980年、大阪工業技術専門学校建築学科卒業。
1980年、高木滋生建築設計事務所、1982年、現代計画研究所を経て、1985年、M.S.建築設計事務所設立、現在に至る。
1991年より、大阪芸術大学建築学科非常勤講師。
1993年、大阪都市景観建築賞奨励賞受賞。
二人の主な作品に、「私たちの家」(1985)、「京都 西賀茂の家」(1987)、「江南の家」(1988)、「天美我堂の家」(1989)、「見晴台のある家」(1991)、「千里N・S邸」(1993)、「わんぱく王国管理棟」(1994)などがある。



熱帯林連続講座

— 未来に森を残すために —



▲ 貴重なスライドを交えて話をされる井上真さん。

第③回 『先住民の暮らしと熱帯林業』

6月4日

⑤ アポリアス版にて

連続講座第三回目は、講師に東京農学部林学科助手の井上真さんをお迎えして、インドネシアの様々な島の熱帯林に住む人々の暮らしについて、お話しして頂きました。参加者は第2回目に比べると、少し減りましたが、それでもたくさんの方が来て下さいました。スライドを交えた井上さんのお話は、まず御実家のある茨城県鹿嶋の風景から始まりました。

始めから東南アジアの景色が出るものかと思っていた私は「ソック!」となりましたが、今思うとこれは井上さんが普通の学舎なのでなく、とても地道な人間的な部分を大切にしている人柄故の事だったんだなあと思っています。

さてその日本の風景は突然調査国インドネシアの首都ジャカルタの姿に変わり、そこから調査地ボルネオ島へと移っていきました。ボルネオ島の先住民ダヤック族の人々のロングハウスでの暮らし、身分制度の名残りである入墨の説明の後、話は彼らの行う伝統的な焼畑農業のことになりました。

この焼き畑農業は、長いサイクルで焼き畑用地を循環利用するもので、森林の回復不能な破壊をもたらす開発とは異なるもののようなのです。焼き畑作業はまず用地の伐採に始まり、乾燥させてから火入れ、二度焼き、種まきの順に進み、ここまですろや田をかけます。

種は陸稻の他にトウモロコシ、キウウリ、キャッサバ、サトウキビ、唐がらし、ナス、カボチャ等様々な野菜類が植えられ、除草作業等しつづける年をかけて収穫期になるということなのです。収穫後の土地は、6年から12年をかけて原生林と変るまでの二次林へと回復し、次の焼畑を待つということになるようです。

この他、井上さんには、スマトラ島、シブル島、スラウェシ島の人々、熱帯林についてもお話しをして頂きましたが、こうした地域に住む人々をとりまく様々な問題、特に経済先進国の人向による開発の、生活への影響が印象に残りました。

最後に井上さんは、自分でやっている調査をどのように捉えているかをお話しになったのですが、スライドに先住民の子供達が微笑んでいる姿を映し出しながら、「この子供達の未来がどうなるのだろうか、彼らの未来の為に研究をしていきたい」と言われたのサ、とても心に残りしました。

◆44回・林業体験&熱帯林学習

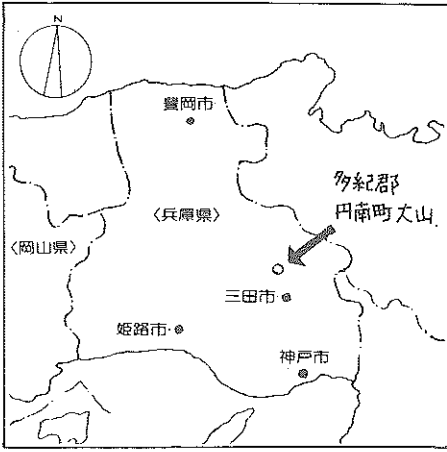
えだ。うち in 丹波大山

94年8月24日〜28日・兵庫県多紀郡丹南町にて

【ウータン・辻村方孝】



▲枝打作業



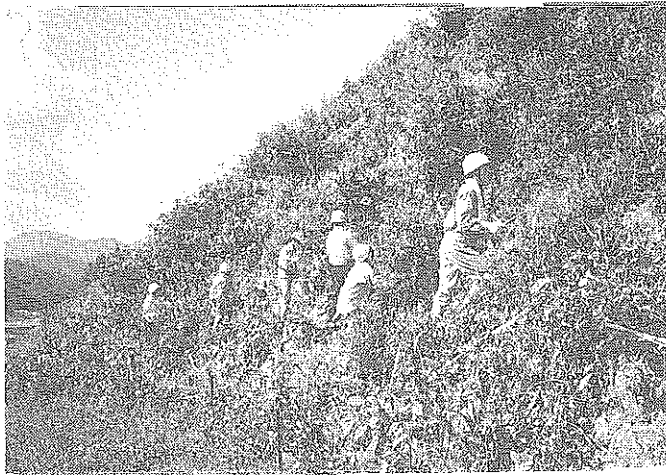
この八月二四日から二八日まで、兵庫県丹南町大山で、林業体験&熱帯林学習「枝打」が開催されました。神戸にあるNGO、(財)PHD協会(アジア太平洋地域からの研修生を迎えて、農業・漁業・保健衛生など)の自立に役立つ研修を日本各地で行うとともに、草の根の国際交流を進めている団体(財)が、地元(財)大山振興会と共同で主催しているもので、今回が四回目。ウータンは、二回目から協力という形で関っており、今回はPHD協会のボランティアでもある荒木をはじめ、浅野・篠宮・西岡・辻村の五名が運営スタッフとして参加しました。

参加者は、スタッフも含めて二四名。今回は若い人の参加が目立ち、また遠く静岡・名古屋から参加された方もいました。参加の動機は様々ですが、将来林業をやりたいという人が何人かいたのは頼もしいかぎりです。

初日二四日(水)は、宿舍の大山荘の里市民農園に午後一時集合。オリエンテーション、丹南町役場からの話のあと、兵庫県篠山林業事務所の笹倉所長から翌日からの作業のあらまし、森林や林業の話がうかがいました。また夜は、PHD協会の研修生、ルーク・スイフアシアさんにソロモン諸島国の話をしてもらいました。

二五日(木)からは、いよいよ作業開始。午前八時一五分に宿舍を出発。苗床を見学したあと、例年どおり大山小学校の生徒さんが卒業記念にヒノキを植林した場所で下草刈り。炎天下、皆黙々と鎌を振っていました。午後は、場所を大山谷の高蔵寺の奥のヒノキの植林地に移して掃除刈り。経験者は鉋(なた)で、初めての人は鋸(のこぎり)で、繁茂した雑木を伐り払いしました。

この夜はウータン・ナイトとすること、ゲームやビデオをとおして熱帯林問題について学びました。さすがに疲れたのか、学習会の後はあまり遅くまで騒ぎもせず、皆ぐっすり眠ったようです。



▲ 下草刈りを体験する参加者。

翌二六日（金）の午前中は、夏栗山へハイキング。途中、笹倉所長の指導で様々なネイチャーゲームを行い、楽しい山歩きになりました。

午後は、昨日と同じ場所で枝打ち。ヒノキに立てかけたに梯子に上って鋸で枝を落とします。節のない良材を育てるためには、重要な作業です。梯子の高さは約5メートル。十分な安全対策はとっているとはいえ、一番上まで上がるとさすがにおっかなびっくりで作業していました。

夜の学習会では、大山地区の歴史について、ビデオを見、また大山振興会の斉藤副理事長からもお話をうかがいました。また、斉藤さん、地元の農家の渡辺省悟さんを交えて、いくつかのグループに分かれて、日本の林業のあり方などについて話しあいました。

大山地区は、平安時代の初期から京都の東寺の荘園として発達し、江戸時代の末期には村の中で協同組合のような物が芽生え、それが大山振興会へと発展していったという話は、とても印象的でした。大山では昨年、ドイツのクライン・ガルテン（「小さな庭園」の意）を取り入れた「大山荘の里市民農園」を誕生させ、都市の人々との交流と共生を図っています。これもまたそうした歴史的な流れの上に位置づけられる試みだということです。

二七日（土）の午前中も前日と同じ場所で、今度は間伐作業を行いました。木の本数を減らして成長をよくするとともに、太さや質をそろえるのが目的です。三本に一本の割合で曲がつた木、成長の悪い木などを選んで鋸で伐っていきます。木が密生しているので、伐った木が他の木に引っかかってなかなか倒れず苦労しました。チェーンソー

を使つての間伐も、交代で体験しました。

作業はこれですべて終了。三日間の作業でいい汗を流しながら、林業の大変さを実感したのではないかと思います。

午後からは宿舍の近くの「ねりん館」で焼き杉細工を体験し、夜は同じ場所でも丹波牛の炭火焼肉で、地元の方も交えて交流会を行いました。三線（さんしん）、ケーナの演奏を皮切りに、キトボードの伴奏で大合唱。でかんしょ節や大山小唄も飛び出して、大いに盛り上がりました。

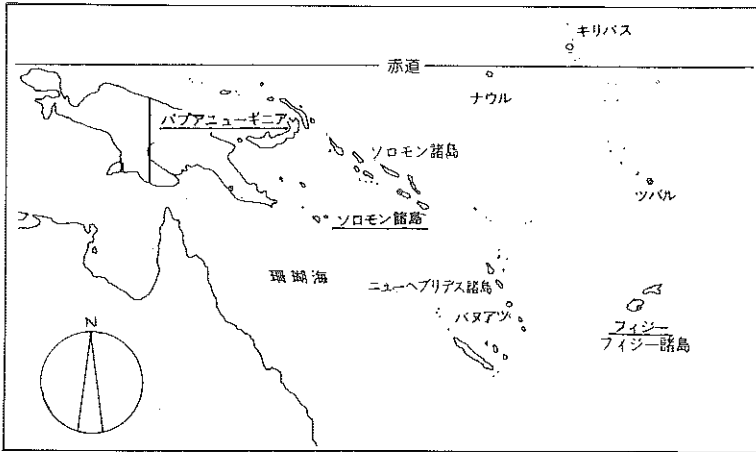
翌二八日（日）は、約一五名が最後まで残って、あと片付けとまとめの話しあいをし、一時間半に解散しました。

事前の準備に時間をかけた甲斐あって、今回の「枝打」は、かなり充実した内容になりました。様々な場面でグループ・デイスカッションやゲームを取り入れたのも、好評だったようです。今後は、さらに内容を充実し、また地元との関係を深め、「枝打」が、林業作業を体験しながら、都市と村の人々が交流し、日本と世界の森について話しあう場になっていけばいいなと思っています。

南太平洋に草の根のつながり

藤野達也 (PHD協会職員)

南太平洋の国々



《南太平洋の風に吹かれて》

紙の無駄使いは避けなければと思いつつも文章の出だしにつまづいて、何回目かの書き直しをしている。理屈もさることながら実践こそと思って、このザマ。熱帯林について専門に取り組むウータンの貴重な紙面だと思えますます緊張してしまふ。といいながら、既に数行、ぐずぐずせんと早く本題に入らねば、。

海外協力の活動に手を染めて一二年目の昨秋から今春にかけ、南太平洋のフィジー、ソロモン、パプア・ニューギニア(以下PNGと略す)を初めて訪れる機会を得た。

これまでアジアの各地は何回か訪ねてきたが、南太平洋はまた違う。短い滞在で、部分的な観察にすぎないけれど、ざっとの印象からすると、ここには極端な貧困はなかった。恵まれた気

候で、ソコソコ土地が各人にあたり、自給自足を基本とする地域共同体の中で、あくせくせず生活をしている。これまで見てきたフィリピン・ネグロスの土地無し農民、痩せて涸れた土地に生きる東北タイの農民、カルカッタやボンベイの路上生活者などの様子と較べ、豊かさを感じる。ある面では、日本の私たちの生活から見ても羨ましく感じるところもある。経済学上の所得水準として数字を見れば、アジアも南太平洋も差はないが、それで測る豊かさ貧しさは一面的で、実際の生活感覚とはズレがある。太平洋地域の村では、着るものも多くいらす、住む家もあり、しゃかりきに働かなくとも自然の恵みの中で得られる作物で食べていける。この生活様式には、金銭が介在することが少ないから、GNPなんかには出てこない。

そんな生活にも国際化の影響がでは



4 太平洋戦争の時のことを話してくれたおぼあちゃん
(パプアニューギニア、マシウレンで)

じめてきている。プラス面もあるが、それだけではすまない。アジアの国々も同様に国際経済のうねりの中にあるが、その過程が太平洋地域よりも長い。よって耐性も一方にある。太平洋地域はこれまであまり相手にされてこなかっただけに、免疫がない。純情無垢な人々が市場経済の中に一気に放り込まれようとしている。それを仕掛けるのは超国家企業であり、欧米、豪州、そして日本も負けていない。熱帯林の問題では韓国、マレーシアといった国の名も聞こえてくる。

《南太平洋地域の森林伐採》

フィジーの木材輸出は、人工林が多いようだが、ソロモン諸島とPNGでは原生林がその標的になっている。外との交わりが拡大することから、いろいろとモノも欲しくなり、買わなければならぬようになってきている。でも目立った産業のないソロモンで外貨を得るのは大変。

アジアでの伐採規制強化からソロモンへの木材需要が高まってきたこともあって、九二年にはソロモンの総輸出額の三七・六%が木材で占められた。現在、十一の外国企業が木材生産を行っている、年間一・五万㎥程が伐採され、このペースが続けば、あと十年で伐採可能な森林資源が枯渇するといわれている。

村に住む人々にはこういった情報は届かず、今のところ危機意識も低い。近年、SIDT (Solomon Islands Development Trust) というNGOが環境保全を活動のひとつに取りあげはじめている。

《金、モノの援助でない国際協力を》

今回、私のソロモン滞在の折には、マライタ島のアノナキナキ村という約二百人の集落を訪ねた。ここには、外国企業による伐採はなかったものの、国内消費向けの地元業者による配慮に欠けた伐採跡にでくわした。

今年、PHD協会では第十二期研修生として、この村からSIDTを通してルークさんという青年を日本に迎えている。彼の日本での研修テーマは、人口増に伴い不足するようになってきた焼畑農法による食糧生産を改善するための適正技術、有機農法主体の農業である。それに加えて、先の伐採跡に外来樹種でなく地元の種での植林が進められていることから、これに役立つ経験、環境を守りながらの開発といった面についてウータンの皆さんの協力を得て学ぶ予定にしている。

PNGには三週間滞在した。PHD協会はLDS (Lutheran Development Services) というNGOと協力関係にあり、主にフィオン半島のフィンシャーフエンの人々とおつきあいをしている。

る。これまでに四人の研修生を招き、農業や保健の分野の研修を行ってきたが、この十月、十一月に短期研修生としてベノさんを招く。

ベノさんには過去の四人の研修先を見てもらう。PHDの研修のねらいをより理解してもらい、村の改善に取り組んでいる四人の効果的な後方支援をしてもらうためである。さらにLDSが展開する地域でも、森林伐採が問題化しており、その対策のための情報収集、日本のNGOとの関係作りを来日の目的としている。

訪ねたいずれの地域も国際化の波に洗われている。そこに奪う・奪われるという関係を持ちこむのではなく、彼らの伝統的な生活様式にある「分かち合う」関係に学び、それを国際的關係に反映させていくことが大切であろう。外から入っていく人・組織は十分に心がけておかねばならないことだ。問題が生じてからの国際的支援よりも、まずは外からの支援を必要とするような状況を生む原因——多くの場合、外からの人的要因になるが——をなくす、もしくは作らないことが先にたつべしではないのか。



▲ 科をまわるNGOの足はトヨタの4WDトラック (パプアニューギニア、フィンランディア)

ここにおいて、日本という国は責任の多くを負っている。森林資源しかり、水産資源しかり。取ってくる関係はむろんのこと、日本から持ち込むモノ、コトについても相手側に及ぼす影響を十分に配慮しなければならぬ。相手の国が小さいだけに、こちらで思う以上の影響力がある。良かれと思ってする国際協力だつて気を付けなければならぬ。

今のところ、日本と南太平洋の国々との関係は政府レベル、企業レベルでの交わりが圧倒的に多い。今後はもつと草の根レベルのおつきあいを拡大し、一般の住民、村の人々にプラスになる情報交換、協力を行っていく必要があるだろう。悲惨な状況のニュースに接しモノ、カネを送る式の援助だけでない形も必要に思う。

海外で貴重な出会い、経験をしてきても、日本に帰ってくるとあつという間に日本のベースに引き戻されてしまう。ルークさん、ベノさんと話すことで南太平洋での学びをよみがえらそうと。また、読者の方にも是非この二人に出会って、南太平洋を身近に感じるきっかけにしてもらえたらと思う。ウータンかPHD協会に連絡して下さい。待っています。

PHD協会 Peace・Health & Human

Development の意味

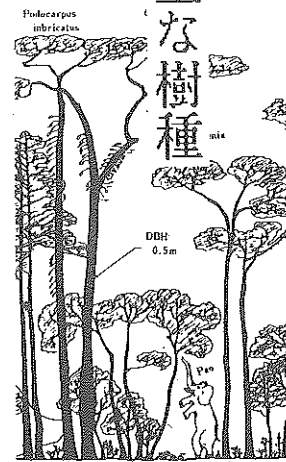
電話・〇七八一三五一一四八九二

連載

熱帯林を考へる

徳島熱帯林問題研究会座長 猪俣栄一

6 林型、地域別の主な樹種



(1) 南洋材という呼び方

前回までで、主な林型や熱帯の土壌と、それを要因とする樹種構成の違い等について述べてきました。

今回は、気象条件、水条件、土壌条件等によって異なる森林タイプから、どういった樹種が産出されるのか、そしてそれらを地域別に見るとどういう傾向があるのかということに、触れてみます。

まず頭に入れておく必要があるのは、前にもちょっと触れたことがあります。私たちは熱帯材という言い方をしております。まずけれども、熱帯林業や熱帯木材を使用する、いわゆる木材業界では、「熱帯材」という言い方はしませんし、また統計上もそういうことばは使われてこなか

ったということ。です。

では何と言うか。端的に「南洋材」という名称が使われてきました。これは、大正の終り、昭和のはじめ頃に、フィリピンの、いわゆる「ラワン材」を輸入しはじめた頃に「南洋材」ということばが使われ、それが戦後も慣習的に使われてきたのです。

第一、当初は熱帯材といえは南洋(東南アジア)の木材に限られており、その他の熱帯地域産の木材が日本に入ってきたのは、フィリピンやマレー半島の原木ソースが枯渇しはじめてからのことです。ですから、合板材料を主軸とした熱帯アジア産の木材のことを南洋材と呼び、それ以外の地域の熱帯産材のことを、業界では、「パプア材」、「ソロモン材」、

「アフリカ材」、「南米材」等と産地名で呼んで区別しています。

ただ、ソロモン材はその中でも比較的開発輸入の時期が早かった関係もあって、業界では割とポピュラーでした。

「南洋材」と言った時の「南洋」とは、どの地域を限定的に指して呼ぶのかということは、南洋材について記述した本でよく問題にされていました。

(2) 南洋とはどのあたり?

以前にも触れましたが、戦前の日本人が「南洋」ということばを使う時、漠然と考えているのは、フィリピン、ボルネオ、スマトラ、セレベス、ジャワ等の大きな島々、そして旧日本の信託統治領であったポリネシア、ミクロネシアを加えたものが一般的でした。では、マレー半島やパプアニューギニア、ソロモン諸島やビスマルク諸島はどうなるのかということが問題でしたし、インドシナ半島は入れないというような議論もあって、そ

れが戦前における南洋ということばの、
ザツとした概念でした。

それが第二次大戦で日本が南方へ勢力
を広げるとともに、南洋という概念の範
囲も広がってゆき、それが戦後の木材業
界になんとなく引き継がれて、南洋材と
いう呼び方になってしまったようです。

(3) 地域による呼び方

以上のように、元々狭い意味で使われ
ていた「南洋」であり「南洋材」という
ことばなのですが、昭和四〇年代に入っ
て、木材の用途が多様化し、広い範囲の
熱帯材が輸入されるようになると、その
全てを「南洋材」という言い方で括って
しまうのは適当でなくなりました。

現に同じ熱帯材でも、フタバガキ科を
中心とした東南アジアの「南洋材」と、
アフリカ材や南米材では、木材の性質も
用途も異なりますので、先程述べたよう
な産地別で呼ぶようになりました。南洋
材と言うのは、いわば世界の熱帯材の中

の一群というような感じになってしま
いました。

その呼び分けと、大体の種類は、次の
ように考えればよいでしょう。(もっと
も、四大外材という時の「南洋材」には、
「熱帯材」という意味を持たせてありま
す)

イ・南洋材

半島マレーシア、旧英領北ボルネオ
(サバ、サラワク州)、フィリピン、
インドネシア全土から産出される広葉
樹材、及びアガチス(アルマシガ)、カ
ウリに代表されるナンヨウスギ科等の、
ごく一部の針葉樹を指す(クリンキ・
パインは分けて考えられる)。しかし
主として熱帯多雨林から産出されるフ
タバガキ科を中心とした合板用材がイ
メージされている。戦前から戦後初期
にかけて、ラワン材(フィリピンでの
地方名、市場名)と呼ばれるわされて
いたことでもわかるように、島しょ部
熱帯アジア産木材を、ごく狭義に捉え
た考え方。

ロ・新南洋材

それに対して、昭和四〇年代後半か
ら、「新南洋材」と呼ばれた一群があ
る。

かつて、高度経済成長に伴って木材
需要の対象の多様化、急速な増大があ
りながら、一方のフィリピン、半島マ
ラヤを中心としていたラワン材のソー
スが先細りしてきたため、開発輸入の
対象地域が拡大され、それに伴いラワン
以外の樹種も合板材として利用される
ようになった。

そうして、従来あまり知られていな
かった、或いは利用されていなかった
木材が輸入されるようになった。

しかしこれらの材は、一部の例外を
除いて、従来の輸入の主流を占めてい
たラワン系統の材に比べて径級が細く、
水中貯木場に保管した際に沈木となっ
たりするほど比重が重かったりして、
荷扱いも異なってきた。

また、それらの材は、乾燥が難しか
ったり、割れやすかったり、適当な用

途が判らなかつたり、第一、正確な樹種の判別すら困難なものもあって、余分な費用がかかつたりで、面倒が多かつた。

それで、これらの新しい産地から輸入されあまり知られていなかった南洋材をひとまとめにして、「新南洋材」と呼んだのである。新南洋材は値段は安かつたが、はじめのうちは用途もはっきり判らなかつたので、主として製材部門で、試行錯誤を繰り返しながら使われていた。

これらのグループが合板材料に使われるようになったのは、昭和五〇年代半ばに、メランティ系が二百ドル近くに高騰した際であった。初めは良質のメランティが高騰した上、入手しにくくなつたために、背に腹は変えられぬという形で使われ始めたのであるが、それから約十年、今日ではそういう少量多種の木材が主流になりつつあるのも、皮肉な話である。

ハ。ソロモン、ニューギニア材

ソロモン、ニューギニア材と呼ばれる一群の材がある。

ニューギニア島のほぼ西半分がインドネシア領で、イリアン・ジャヤと呼ばれ、東半分がパプアニューギニアと呼ばれる国である。

と、うして、その東北に横たわるニューブリテン島やニューアイルランド島からなる群島が、ソロモン諸島と呼ばれ（ビスマルク群島）、早くから開発輸入が行われていた。いわば、

新南洋材の草分けみたいなものである。

早くから使われていただけに、樹種毎の性質や用途が比較的知れわたつていて、新南洋材の中でも特にソロモン材、ニューギニア材と呼ばれていた（イリアン・ジャヤを含む）

その代表的なものとしては、タウン（マトア）、タミナリア、エリマ、カメレレ、セルチス、キャンブノスベルマ等。

ニ。唐木（カラキ）類

コクタン、シタン、テチガイシタン、カリン等、いわゆる御朱印船時代から舶載品として渡来していた貴重木のこゝとである。仏壇用をはじめ、家具、木工品、内装用として珍重されていたが、数量が少なく値段が高いくところから、材積でなく、目方で取引されていた。

（単位は斤きん百六十もとの 〇・六kg）

インド、ビルマ、タイ、ベトナムはじめインドシナ半島等が高級品の代表的産地であったが、早くから資源が枯渇し、インドネシア（セレベス）、フィリピン等の物が珍重されていたが、これも昭和五〇年代半ばに禁輸となつた。代用品や完成品の現地生産等で細々とつないでいる。

なお、タイ、ビルマ、インドシナ半島には、昔から高級木として有名なチークがあるが、これは近年、タイ産のものが乱伐で激減したため、ドラスキン等一部で貴重材扱ひされてはいるものの、唐木とは言わない。

付け加えると、マレイ半島北部から

インドシナ半島の奥地にまで拡がる熱帯季節林乃至は半乾燥林から産出される多種多様な広葉樹一般材は、南洋材の範疇に入れるのかどうかだか、取引上は「ベトナムの〇〇」とか、「ラオスの××」とかいうように、産地を付けて呼ばれている。

ここ数年、タイワンヒノキや米ヒバの上級品が激減したこともあって、ベトナムヒノキが珍重されはじめているが、これも南洋材とは呼ばないようである。

ホ. その他

昭和五〇年代の半ば位から、アフリカ材(カメルーンを中心とした大西洋岸中部アフリカ)及び、ブラジルその他の中南米諸国産の熱帯材が日本にも出回るようになったが、何しろ距離が遠く、運搬が高くつくので、今のところ、固くて色の綺麗な(ブビンガのような)高級樹種を中心に、突き板や集成材の表面装飾用に少量が入荷しているだけで、これも、アフリカ材とか、

南米材と呼ばれていて、南洋材とは言わないし、熱帯材とも呼ばれていない。

(4) 地域別の簡単な樹種一覧表を参考までに挙げておきます。

*次ページにあります。



去る7月10日⑩アポオ大阪での猪俣さん「なぜ熱帯林を守るのか?」というタイトルで話してもらいました。

●いゝまた、えいごさん

昭和29年東京生まれ。35年(5)から兵庫 茶屋町で自然保護運動に取り組み。44年、小松島海上保安助務となり、徳島在住。徳島の自然林を守る会を結成し、県内の自然林保護運動を進める。環境保護会代表。日本自然保護協会理事。日本自然保護協会会員。小松島市大林町森の本26-24。

(4) 地域別の簡単な樹種一覽表

地域	気候的林型	主な産出樹種	特徴(参考)
フィリピン	北部と山地多雨林(一部雲霧林)	パロサピス、アビトソン、カアール、セカール、レットラワン、ロンガシノロ(イエロソング)、ギホニ、キマギス、カマゴソ、スバ(パワラソンのみ)、アルマシガ、マツギス	森林立木の75%をツタバガキ科が占めるといわれる位多い。また全産地中、最高品質を誇り、他国産の同種のものより価格も高い。殊にレットラワンはフィリピンの木が唯一と呼ばれていた。また、ホワイトラワンは、戦前ベニヤ用として最高級品。カマゴソはコクテラの代用に使われている。(同種)
マレーシア マラカ	平地多雨林、低山地多雨林、雲霧季節林(北部)	クルイソン、カアール、メルサワ、ホワイトセラヤ、バラウ、レットセラヤ、セラヤ、セビター、チンバス、ジエルトン、レンガス、レサック、ニアト、アガチス、ピンタソングール	商業伐採の他、大面積のゴム園への転換でフィリピンよりも先に枯槁し、輸出禁止になった。70年輸送の独特な造材をしている。このセラヤは、材質、等級とともに最高級品であった。現在、産地に植えかえたゴムの最利用が図られている
サバ州	平地多雨林、低山地多雨林	クルイソン、カアール、メルサワ、ホワイトセラヤ、レットセラヤ、イエローセラヤ、メラビ、セラソングランバツ、ピンタソングール、レサック、ジエルトン、ニアト、ゲロソング、セビター、セソクラワン、ラミン、チンバス、ソングロニ	南北ボルネオを通じて、セラヤ、メラソングラ類の品質は最も優れているが、その割に面積が小さいので、興地まで曾伐がすすみ、殆ど枯槁状態。サラワクのチャイニーヌ資本も入っているが、日本との商社は殆ど引き上げた。
サラワク州	平地多雨林、低山地多雨林、湿地多雨林	クルイソン、カアール、メルサワ、レットメラソング、イエローセラヤ、ラソング、メラビ、セラソング、ジエルトン、ジョソソング、レサック、セビター、アガチス、セソクラワン	このチャイニーヌ資本は強大で、他のアジア木材産地とは全く伐採及び販売事情が異なり、価格決定は現地資本が握っている。現在工業化が急速に進行中。
インドネシア スマトラ	平地多雨林、湿地多雨林、低山地多雨林	クルイソン、カアール、メルサワ、ホワイトメラソング、レットメラソング、イエローメラソング、ピンタソングール、チンバス、メルバウ、メルクソング(※1)	南業部は広大な低湿雨林が広がっている。北西部は低山地多雨林が多く、また、インド洋側の島嶼部は、早くからメラソング類の伐採、輸出が行われていた。※1:メルクソングは大量産林されているが、内外のバルブ用。
西カリマンタン 南カリマンタン	平地多雨林、湿地林	クルイソン、カアール、メラソング、ラミン、ジョソコソ、ジェルトン、セラソング、バツ、チロソング、ダマール、アガチス、	メラソング類の類はあまりよくないが、早くからラミン、ジェルトンを中心に製材が進んでいた。
東カリマンタン	平地多雨林	クルイソン、カアール、ホワイトその他のメラソング類、メルサワ、バソキライ、レサック、ダマール、アラライ、ケンバス、ピンタソングール、ニアト	世界の最高の樹種を有する熱帯林はここにある。(第3回、4回参照)現在、サラワクとの国境の山地にまで伐採が進んでいるが、丸太禁輸以来、正確な伐採量は不明である。
イリアンジャヤ	平地多雨林、低山地多雨林	アトア、ダマール、カロソング、カメレシ、キヤソング、エリン、クーンバツ、バソキライ、ニアト、マソングロニ	面積が広大で、資源調査も充分ではなく、また伐採量の実態も不明。
セレベス	平地多雨林、雲霧季節林	エボニー、ターミナリア、トアソング、ニアト、アガチス、ダマ	国内では最大のエボニーの分布があると言われ、現地加工に日本も参加していた
P. N. G. (ソロモンを含む)	平地多雨林、常緑季節林	タウソ、カロソング、キヤソング、クーンバツ、カチリウ、カメレシ、ニアト、ペンシム、アラソング、モネラ、アラソ、カカリ、N.G.バソソング、N.G.ウエールソング、マソングロニ	現在、色々な意味で盛も注目されている地域。当初は年間10万品に伐採量を抑えたり、輸出制限した時期もあったが、オーソトラリアの撤退と共に、森林開発も激増した。
インドネシア半島 タイ	平地多雨林、常緑、半乾季森林	エボニー、カリン、コソ(ピンタソングール)、ラロク(レンガス)サクラ、その他多種のM.L.L.、チーク、唐木類、	ベトナム戦争とカンボジア内戦で木材貿易が中断していたが、江戸時代以前からの唐木産地として有名。ベトナムとの復交を控えて、熱い眼差しが注がれている
ビルマ	〃(上に同じ)	チーク、エボニー、グルタ(レンガス)、ビルマソング(※2)	軍事政権が出現以来、木材取引は中断。※2:正確な蓄積量は不明。



毎回ウィタン森と生活会報いただき有難御座います。

四苦八苦とのことですがガンバツテ下さい。

今回学習・枝打ち参加できず残念です

山口武雄

いつも会報をお送りいただいているにもかかわらず、何のお手伝いもできなくて本当に申し訳ございません。

現在は神戸から転居し、兵庫県・氷上郡周辺で無省農薬野菜の生産販売をしているグループの一員として理想とはかけ離れた(?)雑事に追われる生活をしています。ボランティア活動をする時間をもう少し増やすつもりで始めたはずの仕事だったのですが:

同封していただいた「枝打」の学習会の主催者のPHDの草地さんと今井先生のお二人には貴重なお話をきかせていただき、また素

晴らしい出会いと体験の場を提供していただきましたこともあり、ぜひとも今回参加したいのですが残念ながら休みをとることができません。暑い時期で当日は大変でしょうが有意義な五日間となりますようお祈り申し上げます。

野見山健一

新規加入します。よろしく願います。

古川文月

(敬称略)

【会費・カンパをいただいた方】

江本静 竿本知美 助友伸子
千代延明憲 中島紘 野見山健一
藤井満 古川文月 松尾みち
山口武雄
グループ地球人 深尾葉子
(24.8月末まで)

★まだまだ94年度会費をいただいでいない方もおられるようです。会費・カンパと、わずかばかりの物品売上げ、それに、スタッフの汗と手弁当(実際には、近くの中華屋さんの焼飯やギョーザ)で活動しています。

ウィタンを支えるのは、アナタです!
ほんまによろしゅう、おたの申します。

「悩める会計より」



(photo. 井上真)



▲ 「カリマンタン島(インドネシア)の先住民ケニヤ族の男性の足と井上さんの足」
 森を生活の場とする先住民の足の指はしごりと地を叩く (左) (右)
 ために発達し指の間が広く開いてくる。

助手。農学博士。

復帰し、一九九一年四月より東京大学農学部林学科
 一九九〇年一月、森林総合研究所林業経営部経済分析研究室に
 に参加(二年九ヵ月)。

で実施されている「熱帯降雨林研究プロジェクト」

インドネシア共和国東カリマンタン州(ホルネオ島)

一九八七年四月より一九八九年二月まで、

農林水産省・森林総合研究所へ。

一九八三年、東京大学農学部卒業後、

一九六〇年、山梨県生まれ。

井上 真(いのうえ まこと)

HUTAN ACTION SCHEDULE

熱帯林連続講座・part.2

Save The Tropical Forests

『アジア・太平洋地域の熱帯林は今』

又
やり取り
させて
みる。

タイトルは

- 好評の「熱帯林連続講座」11月9日は Part 2 をお送りします。今回はこれまであまり取り上げてこなかったマレーシア以外の熱帯林の現状について、毎回様々なゲストを迎えてお話をうかがいます。ご期待下さい。

① 「ソロロア・ニューギニア」の巻 日時 11月19日(土) PM6:00～
【ゲスト】ベノ カネオさん (LD5、レテラン・ティペロ、ラグナット・サービス取扱い)

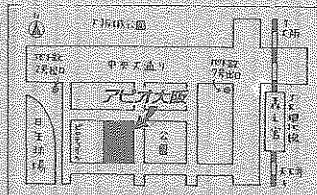
※当日19日PM2:00 ニュートラム「南港口駅」改札集合してベノさんといっしょに「南港口木場見学会」も行ないます。

② 「ソロロモン」の巻 日時 12月17日(土) PM6:00～

【ゲスト】ルーク・スイアファンさん (PHD 協会研修生)
宮内 泰介さん (福井県立大学 経済学部 講師)

【以後の予定】③「フィリピン」の巻、④「インドネシア」の巻、⑤「日本」の巻」と続きます。

【会場】アピオ大阪
Tel. 06-941-6331
(JR環状線森宮駅下車南へスク)



「ワン・ワールド・フェスティバル」は、みんなが自然に生きる世界をつくるために、一人ひとりができることを考えよう、という国際協力のお祭りです。

ONE WORLD FESTIVAL 16

ワン・ワールド・フェスティバル'94

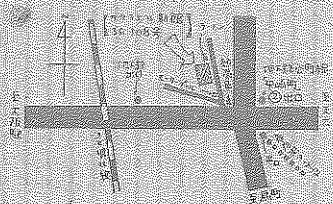
●1994年10月16日(日) ●10時～16時 ●雨天決行 ●大阪城公園・太陽の広場

●JR環状線・大阪城公園駅 / 地下鉄・四つ宮駅下車 御お問い合わせ / 関西国際交流団体協議会 TEL.06-773-0256
●入場無料 ※車でのご来場はご遠慮ください 〒543 大阪市天王寺区上本町6丁目2-6 大阪国際交流センター2階

今回「ワン・ワールド」フェスティバルにてパネル展示・グッズを扱うことになりました。STAFFも来ていますのでのぞいて下さい。

パネル展示
●NGO大集合!
関西のNGO(民間の国際協力団体)約70団体が一堂に集い、それぞれの活動を紹介

【ウータン事務局】



●ウータン定例会は、第2と第4火曜日午後7時半から「関西市民連合」事務所(上記地図)にて行っております。
TEL:0693-720-1501

クノ思いつきすぎたとはいえず、各地で相変らずの水不足、国はこれでダム造りが楽になるわい。と思っでいるだろう。根元の木の問題が浮きぼりにされることなく……。

が、田園のあるところでは子供にうぐいすの土流に「広葉樹を植えよう」という話もある。ひがみか……。

役人さんももう少し考えて下さいよ。予定より少しみくられた「ウータン」も「撥れたよ」という声も……。

これらもよろしくうい。

HUTAN

